福祉とともに生きる

田鶴小学校　五年　榎本　海尋

ぼくのお母さんとおばあちゃんは、昔介護士として介護し設で働いていたときがある。お母さんもおばあちゃんも、要介護5という一番介護が必要な階で働いていたそうだ。食事の介助、オムツ交かん、トイレ介助、入浴介助など、すべてにおいて介助を必要として いる人達がいるということ。その中でも自立している人もいるが、自分だけではむずかしいことを介ご士が手助けをしたり、人それぞれだ。一人一人にあった介ごや声かけの仕方が大切だとお母さんは言う。

高れい化社会がすすむ中で、特に介ごを必要としている人達がふえてきているということも事実で、これからの大きな課題となっている。ぼくはご飯も自分で食べられるし、トイレもお風呂も自由に行けて、不自由なく、くらしている。でも何気なく通っている道や、ちょっとした段差や階段も、困っている人が

たくさんいるということをぼくはあらためて考えさせられた。

ぼくは今、点字が気になっていて、生活の中でもさまざまなところに点字が使われている。缶や文ぼう具、お札にも点字が使われていることにおどろいた。お札には、識別マークといって、お札の左右下にざらつきを持たせたマークがついている。お札の種類によって、マークの形状が異っていて、一万円札はハガキ型、五千円札は8角形、千円札は横ぼうが印刷されている。それを指でさわることにより、識別できるそうだ。点字は、目の不自由な人にとって、大切な文字であり、情報である。あんな小さな点字をさわるだけで、これは何なのかや、色々な情報がわかるので、すごいと思う。

今まではあまり点字を気にしていなかったけれど、何気なくある点字も、必要としている人がいるということ、点字だけではなく、住みやすいかんきょうにするためにに、工夫さ

れていることを、もっとくわしく調べてみたいと思った。自分で色々調べてみることによって、さらに興味をもつことができたり、自分なりに考えることができると思う。そして、それを必要としている人達の立場になって考え、思いやりの気持ちを大切にしたい。

20 × 20